

青森県産にこだわった野菜や果物を使った菓子工房に相応う建物。

施主 農園カフェ日々木

一般社団法人 日々木の森
青森県十和田市相坂高見147-89 TEL.0176-27-6626

代表 立崎 文江 様



県産材を使用した部分

《内装》

スギ(床・建具・家具)

《構造》

ヒバ(土台)・スギ(柱・梁)

《外装》

スギ(外壁)

古民家カフェに合う建物。

築70年の農家の古民家をモダンに改装した建物で、暖炉に当たりながらゆったりランチを食べることができる「農園カフェ日々木」。カゴ盛りランチが評判なこの古民家カフェは、南側にブルーベリー畑もあり、障害者就労支援としてジャムやお菓子、漬物などの製造加工も行っています。



2007年から営業し、製造加工は点にする場所で行っていましたが、手狭になってきたため、菓子工房と事務所を兼ねた建物を新しく建てることになりました。2023年冬に竣工した建物は、古民家とブルーベリー畑の間に建ち、構想から2年かかりました。

健やかな暮らしを提供したい。

オーナーの立崎さんと2年に渡るキャッチボールを続けたのは、株式会社建築工房零

の福井さんです。

平屋のL字の建物は、カエデの木を包むように建っていますが、この木は元からあった木。「このカエデの木は残しましょう」と福井さんが言った時に、立崎さんは福井さんへの全信頼が芽生えたそうです。真夏の工事中も職人さんが涼み休憩の場所になったのが、この大きなカエデの木でした。

そんな木を大切に作るエピソードからもわかるように、建物は木をふんだんに使いました。そもそも古民家の隣に建てるものなので、馴染むような木を使うのは必須。菓子工房や北側の床暖房の部屋などに無垢材は使えませんが、それ以外の大部分には県産材のスギとヒバが使われました。

建築工房零は、国産材を使うのが標準仕様。長年国産材を使ってきた福井さんは確固たる信念があります。木材を活用して作り出すものは建物だけではなく、その先にある心も身体も健やかな暮らし、と考えています。



SDGsの観点からも国産、県産木材を積極的に活用することは個人だけではなく、社会課題への解決へと繋がります。

大切なスタッフを癒してくれる空間。

立崎さんだけではなくスタッフたちも、仕上がりで大満足だそう。菓子工房は大きな窓がついており、スポットライトも配置され、外から見学できるようになっていました。

「青森県産にこだわって、野菜や果物を使った菓子作りをしています。誰か1人が欠けても、お店や商品作りが滞ります。そんな大切なスタッフにスポットを当てたいというのが、建てる上でのテーマでした」と立崎さん。



事務所となった部屋はスギの机や家具がしつらえてあります。様々な用途を想定したコミュニティスペースもあり、大きな窓からふんだんに太陽が入り、無垢のスギ材の床でポカポカしています。ここではきつと、皆がおらかな気持ちでいられることでしょう。



内装に県産スギをふんだんに使い、 歴史ある煎餅店としての貫禄を演出。



県産材を使用した部分 《内装》スギ(壁・天井・商品棚)

創業百五十年の重み。

おいらせ町の商店街の一角にある川越せんべい店は、さりげない佇まいでお店を構えています。実は南部地方で最古の南部煎餅のお店です。

入り口を開けると、ガラスの向こうには大きな煎餅焼きの石窯の機械が鎮座し、右手奥にはカウンタートとショーケースがあります。約3坪という店内ながら、壁も天井も木で統一されたシックな店内に、ゆったりとした気持ちに包まれます。内装で使われた木は全て県産スギ。煎餅と木の香りを感じながら、煎餅を選ぶ贅沢な時間を演出しています。



食文化を伝えるため。

創業百五十年という歴史を誇る川越せんべい店を背負うのは五代目となる川越将弘さん。川越さん曰く、南部煎餅の起源は縄文時代にまで遡るそう。やませが吹き、お米の収穫が見込めなかったこの地域で、連続

と受け継いできた食べものが、たまたま明治時代になって「南部煎餅」と呼ばれるようになったのだから。

文化人類学を大学院まで学び尽くした川越さんと話していると、百五十年が短く感じられてしまうくらい、長く広い視野で物事を見ているのが伝わってきます。川越さんは、百年後にもこの食文化が残るよう、国産の材料にこだわり、手こね手焼きで煎餅を作り続けています。



ブランド価値を 高めることに成功。

そんな川越さんが、店内の改装に踏み切ったのは、コロナがきっかけ。焼き場と売り場を隔てるものがなかったため、「衛生管理」さらには「ブランド価値を高める」ための店舗改装を目指しました。

依頼を受けた株式会社WAAでは、石窯の機械で店主が煎餅を焼いている姿が見えるようガラスを設け、内装に木を使うことを提案。当初は予算の関係で一部だけ木を使う予定でしたが、工務店が川越さんの



川越さんが伝えたい「近くの素材を使う」というシンプルでありながら力強いメッセージは、時々職場訪問で訪れるという地域の小学生たちにも伝わっていることでしょう。川越さんは「私自身もこの建物のように、「国産」にこだわって煎餅作りを続けています。地元の経済活性化のためにも、木も地元のものを使うことをオススメしたいですね」と語ってくれました。

いとこだわったこともあり、工務店の善意で全て無垢の県産スギで仕上げることにしました。シンプルな食文化継承という川越さんのこだわりに合わせて、塗装もあえてしませんでした。

結果、「国産の材料」「手こね手焼き」というこだわりにびびったりな店内改装が実現。川越さんとしても、お客様に良いものを届けているという自覚自負も強まり、長年の課題だった商品単価アップにもつなげることができました。



文化財レベルの古民家再生に 県産材が「役」。

【施主】 大正昭和ロマン喫茶 段ノDe

青森県十和田市法皇川口平49-1
TEL.0176-72-2061

代表 椿 千鶴 様



【県産材を使用した部分】

《内装》
スギ(壁・天井)

《構造》スギ(柱・下地材)
アカマツ(床材)・カラマツ(下地材)

《外装》
スギ(外壁)

生家を再生したい。

十和田から青森に山越えする道の途中、集落に入っていくと小高い丘の上に、威風堂々とした大きな古民家が立っています。何かの文化財ではないかと思うほど、圧巻の2階建ケヤキ作りの古民家は、2023年4月にオープンしたカフェ「大正昭和ロマン喫茶 段ノDe」。

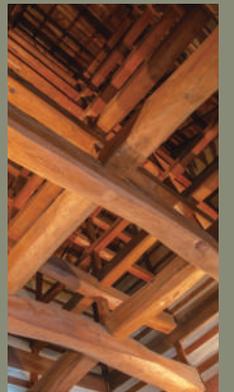


中に入ると吹き抜けの天井に、見事な梁が何重にもかけられています。「その梁にプランコをつけて遊びました」と楽しそうに語るのは、喫茶段ノDeのオーナーの椿さんです。

椿さんは八戸で40年続くスナックを経営していますが、コロナを機に、放置されていた生家の改装に着手しました。「生家を復活させた」といって、3年掛かりの難解なコロナ事業再構築補助金申請も乗り切れたのだそう。

県産材が当たり前の時代。

この地域は、十和田市の開拓に係る新渡戸家が稲生川に続く人工川を通すために掘った「幻の穴堰」に近く、その人夫たちで賑わったという歴史があります。八甲田山で遭難した雪中行軍の休憩所にもなったという歴史あるこの建物は、昭和2年に落成したものでした。



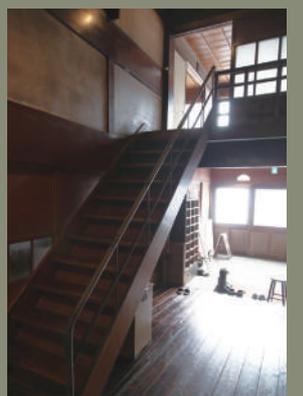
「この時代の建物は、大工さんが建物を建てる現地の山へ行き、東西南北を確認しながら木を選ぶという建て方。そうして建てられた建物の改装に、近隣の県産材を使うのは当然のこと。改装した部分が、古い部分になじみますからね」と語るのは、青森県古民家再生協会会員でもある大坊建設の大坊さん。

見事に再生した文化財級の古民家。

雨戸だった部分はガラスとサッシになり、玄関の高さも変更してバリアフリーの建物にアップデートされました。放置され崩れそうになっていた建物が見事に再生し、古き

良き時代を伝える姿になりました。

お店を開業するためのリフォームでしたが、「一番は「両親に見せたかった」という椿さん。離れて住む「両親にも大変喜ばれたそうです」。



あまりにも素敵に仕上がったため、あつという間に有名になったカフェは、海外からの観光客も押しかけ、連日大賑わいだったとか。冬季はカフェを休業していますが、だんだんと余裕が出てきたら、もっと地域と密に連携して民泊プログラムなども実施してみたいのだとか。「地元に住まわせてもらっている。だから恩返しをしたい」と話す、椿さんと大坊さん。県産材に囲まれた建物で過ごす、自然とそう思った思考になるのかもしれない。



有限会社 大坊建設 | 取締役 大坊 幸吉 様

●青森県三戸郡田子町大字田子字下田子69-4 TEL.0179-32-3580 ●E-mail : kouki299@leaf.ocn.ne.jp

無垢の県産スギをあえて外壁に使い、 お店の顔として育てる。



〈外装〉
県産材を使用した部分
スギ(外壁・外側ルーバー)・ヒバ(踏み台)

予約制の絵本屋さんとして
子育てを応援。

十和田市の中心部から少し南に位置する住宅地にある、絵本屋「絵本とサンポ」。節のある無垢のスギの外壁が目印です。



店内も木をふんだんに使った仕様で、さまざまな絵本の表紙を眺めることができ、お客様にあたたかく安らぐ時間を提供してくれます。子育てに追われている親たちに、少しでもホッとしてほしいという願いで2021年から始まったお店は、プライベートを守るため「予約制」となっています。このお店を始めたのは、県外から移住してきた関口さんご夫妻です。

県外から移住して
開業する
心細さを包む。

子育て中の親たちが息できる空間をつくりたいと、株式会社WAAの渡部夫妻に住居の一部のリフォームをお願いしました。同じ移住組ということで公私共に交流を深めていった四人。最終的には四人にしかできない木と遊び心が溢れる形に仕上がりました。

アクセントになっている外壁の県産スギは、メンテナンスが必要だということも把握した上で使用することを決めました。大工さんがつくり始める前に、塗料を塗らせてもらったという関口夫妻。「その時は冬でしたので、木材のいくつかは凍っていました。同じ木材に見えて、一つひとつ違う。木が生きていると実感しました」と語ります。それは、二人のお店が誕生するための儀式だったのかも知れません。



その後、定期的なメンテナンスは二人で行っているそう。手間がかかる無垢材だからこそ、お店を育てているような気持ちになるのでしょう。「県産の木材を使うことで、県外から来て、新しいことにチャレンジする自分を守つてもらっているような気もしました」と関口さん。

商品開発をする中で
スギ林の健康度に気づく。



関口さんたちは、農業などにも乗り出し「日本ミツバチのはちみつ」や「紅茶」などの商品開発も始めています。

農業を始めて気づいたことがあるそうです。「近隣のスギ林に目を向けると、手入れされている林なのか、そうでない林なのかすぐにわかります。単純に地元の経済を良くするだけでなく、身近な林を健康にするためにも、県産材をもっと使ってほしい」と関口さんは語ります。

渡部さんからは「県産材はもっと使いたいし、ニーズもあると思います。設計段階で使えるよう形や価格の情報を誰でもアクセスできるようにしてほしいですね」とも。

「お店に来る子どもたちの未来のためにも、大人は県内で良い循環を生み出す選択をしたいね」とそんな共通の想いを再確認する関口さんと渡部さんでした。



「マデッコ」とは、南部地域の方言で「ていねいに」。

マデッコな建築で、あたたかな時間を。

施主 川村農園 マデッコハウス 青森県八戸市市川町南尻引15-4 TEL.090-5353-7374 | 川村 久美 様



県産材を使用した部分 (内装) アカマツ(床) スギ(内壁・勾配天井) (構造) ケヤキ(大黒柱)・カラマツ(大引き・根太) クリ(土台)・スギ(柱・母屋束・桁・母屋)・アカマツ(梁) (外装) スギ(外壁)

自然栽培の農園カフェに合う「ていねい」な造り。

八戸市市川にある、自然栽培で野菜を育てている「農園カフェマデッコハウス」。「マデッコ」とは、南部地域の方言で「ていねいに」という意味。ていねいなサービスや商品だけでなく、木1本1本と向き合って建築を考える「大工舎」のていねいな思いも重なり、実に「マデッコ」な建物になっています。

り過しているそうです。

このような構造のおかげで、将来的には、大黒柱と梁を利用してパーテーションをつくらせて部屋数を増やしたり、ロフトの延長に床をつくらせて二階をつくらせたりと、店の方針によって内装を一新することも可能になっています。

開業から7年経つてもなお、木の匂いで満たされている同店は、お客さんたちの日々の緊張が溶けだして、リラクセスした空間になっています。床板にもアカマツを使用しており、使用していくなかでできた傷でさえも、ひとつの魅力にしてしまおう木材の包容力は、まるで店主の川村さんのようです。



天然無垢材にこだわった建築。

川村さんは退職後、保有していた小屋を夫婦で解体し、新しくカフェを建てようと考えていたそうです。

昔から木や森といったナチュラルなものが好きで、これから建てるカフェにも無垢材を使いたかったという川村さん。その要望に応えてくれる施工会社を探して見つけたのが大工舎でした。

大工舎では、建材店から製材を買い付けるのではなく、自分たちで製材を行う工務店。だからこそ、川村さんの願いを叶えることができました。工務店の現在の作業トレンドは、いかに効率よく建てるかを重要視し

県産材満載のリラクセス空間で、ほっとひととき。

店内の中心にそびえ立つ硬質で頑丈なケヤキの大黒柱に、強度の高いアカマツの梁が交差し、天井を支えています。ロフトへとつながるはしこもあり、小さなお子さんはここで冒険を楽しんだり、横になりながらのんび



た作業方法が主流ですが、大工舎ではその真逆をいく方法で施工にあたっています。木材の特性をよく知り、選定や製材、乾燥などを自分たちで行うからこそ、時間はかかるもの、お客さんの要望に応えた無垢材を使用する建築が可能となっているのです。

また、川村さんは「県産材を100%使用する」と聞いた際、木材のフードマイレージだと感じたそうです。環境への関心も高い川村さん。木材の輸送にかかる環境負荷も軽減できることは、思いがけないメリットだったといいます。



大工舎 | 代表 平戸 憲行 様

●青森県三戸郡階上町大字道仏字泉田窪21-2 TEL.0178-87-3547 ●E-mail: daikusya@kcf.biglobe.ne.jp ●Web: https://www.daikusya.com

街にひらかれた、あたたかみのある パン屋さんを青森ヒバで表現。



県産材を使用した部分

《内装・造作材》

《構造》

《外装》

ヒバ

ヒバ(土台)・スギ(柱)

ヒバ(外壁)

年齢を問わず 入りやすいお店に。

八戸市の中心街に位置するブルーランジェリータカは、小麦本来の味を楽しめる、ハード系のパンから、調理系や菓子パンまでを取り揃えた親しみやすいパン屋さんです。パン職人の才神さんと奥様の二人が、小さいながらも毎日できる範囲でおいしいパンを製造販売しています。そんな素朴な愛すべきお店だからこそ、木をふんだんに使ったあたたかみの感じられる建物となっています。

元々は八戸市南類家の人気店でしたが、貸店舗だったため、自分の理想のお店を建てたいと、2017年八戸市の中心街番町に移転しました。才神夫婦の伴走者となったのは、檜屋木材店の四代目であり、1952HINOKIYA一級建築士事務所 柁澤さんです。

「質の良い風合いのある木をふんだんに使いたかった」という才神夫婦の依頼を受けて、柁澤さんが設計・監理を担当しました。



防火地域で外装に 木を使う挑戦。

ブルーランジェリータカの建物の最も特徴的な点は、コンクリート造りの建物に囲まれた街の一角で、県産材の天然ヒバを外壁全面にあしらっている点ではないでしょうか。温もりのある見た目は、街ゆく人たちをどこかホッとさせてくれます。



「この場所は防火地域なので、外装にヒバが使えるのか慎重に検討を重ねて設計しました。」と柁澤さん。建築基準法告示を読み込んでヒバを外壁に使用する方法を検討しました。また、理想の外観を実現するために、庇に照明を組みこんだり、雨どいが直接見えないように工夫するなど、壁面の細かい納まりを大事にしました。「木を使って柔らかい温かみのある雰囲気を出すという狙いは実現できたと思います」柁澤さんがそう語るように、お店には毎日学校帰りの学生や年配者など、幅広い客層が訪れています。

八戸中心街の 街づくりにも一役。

内装にも県産材がふんだんに使われています。土台のヒバや柱のスギは見えませんが、カウンターや窓枠、工場と売り場の境目に配置されたガラスに嵌め込まれた組子にもヒバが使われています。

「好きなものに囲まれていると自分も温かみを感じます。特に窓辺のヒバのカウンターは手触りが良いです。カウンター越しの風景を、いつも素敵だと思っています」と才神さん。外装は特にメンテナンスを必要とするものですが、年月を経て艶や趣が出てくるのを楽しみにしていると語ってくれました。

近くには八戸市美術館がオープンし、八戸中心部の都市計画は着々と進んでいます。県産材を使ったブルーランジェリータカのような個性ある建物が、大企業が集まった画一的都市の風景とは違う、八戸市ならではの独自性に一役かっています。県産材を使うことは、個性ある街づくりにも繋がっています。



県産材が体現した夫婦理想の生活スタイル。農のある暮らし。

移住して農を体験する 民宿・カフェを開始。

五戸町に孫ターンした佐藤夫妻は、結婚前から共通の夢がありました。岳広さんは「幼少期の長期休みの度に過ごした祖父の五戸町の家でいつか暮らしたい」。美穂子さんは「ボランティアや語学留学などで1年半過ごした、中国での農村暮らし」を夢見て、それぞれ東京の企業で働いていました。そんな二人が結婚し、夢を叶えるために岳広さんの祖父の家に引っ越してきたのが2016年。2019年には民宿を、2020年にはカフェをオープンしました。書道教室や農業もしながら、何足ものワラジを履いて奮闘しています。

音水小屋は岳広さんの祖父が住んでいた母屋に併設された馬小屋でした。その小屋を、1階はカフェ、2階は民宿用2部屋にリフォームしています。担当したのは大工舎の平戸さん。平戸さんの建てたマデッコハウス（11ページ参照）を見て「目惚れし、お願いすることにしたのだそう。

何回も活用できる 木材の魅力。

音水小屋の壁には明るい県産材のスギが、床にはヒノキ、階段の床板には小屋時代の床だったアカマツが使われています。柱や梁は、部が真つ黒な木材ですが、これは親戚の茅葺屋根の民家を取り壊した際にもった木材なのだそう。真つ黒な木材は、民家から小屋へと再利用され、さらに今は音水小屋を支えています。「この木は手斧（ちような）削りがされているので、だいぶ古いものだと思います」と平戸さん。



県産材を林業会社から丸太で買い、小売業を通さないことで無駄のない家作りをモットーとする平戸さん。ログハウス関連の仕事でカナダにいた頃に見た、ダグラスファー（米マ）が地平線が見えるまで伐採された景色が自身への戒めとなっているそう。「カナダの木は日本に輸入されるため大量に伐採されていました。その後青森にリターンして、使われていない人工林がいっぱいあるから、自分はこの木を使って家を建てたいと思いました」。

都会から来る 修学旅行生が喜ぶ木の家。

音水小屋には、関東圏からの修学旅行生たちが農業体験のために訪れます。問い合わせの段階から「木の家ですか?」と聞かれるほど、都市部の子どもは木に触れ合う機会が少ないでしょう。

「子どもたちは、木の匂いがして落ち着く。食べ物も美味しいと本当に喜んでくれます。木の建物は自信を持ってお客様をお迎えできるのでおすすめです」と、胸を張る美穂子さん。夢に見た農のある暮らしを実現しながら、お客様にも伝道する毎日です。



施主

農家民宿・カフェ 音水小屋

青森県三戸郡五戸町倉石又重上工平16-2
TEL.090-2796-9974

佐藤 岳広・美穂子 様 夫妻



県産材を使用した部分

《内装》アカマツ(床)
スギ(壁・天井)《構造》カラマツ(根太)
フリ(土台)・スギ(柱・桁)《外装》
スギ(外壁)

130年の歴史を物語る 看板になるような店構えを目指して。



県産材を使用した部分

〈内装〉

スギ(和室柱・長押類)

〈構造〉

ヒバ(土台)・スギ(柱)

〈外装〉

スギ(化粧垂木・窓格子)

麹屋を建て替えるという 大きな挑戦。

森田麴味噌店は、創業1887年という歴史を持ち、秋田県大館市と八戸を結ぶ国道104号線沿いに位置しています。2015年に104号線の拡張工事の話が持ち上がったため、築70年ほどの木造の住居兼店舗を取り壊し、店舗を新築することになりました。



店舗の地下には伝統的な麹つくりに必要な土室があり、工事などで麹菌を死滅させれば、麹屋の商売が存続できません。「道路拡張の話がなければ、建て替えずに考えていませんでした」と森田さん。

建替え前から付き合いがあり、神社仏閣

を数多く手掛け地元の木材を取扱っている松本工務店に建替えを依頼しました。経験豊富な松本工務店とはいえ、麹菌を相手にするのは初めてでした。土室はビニールで覆い、石垣で補強。なるべく麹菌にダメージを与えないよう、振動を最小限に抑えて古い建物を解体しました。また、麹菌の繁殖を妨ぐ納豆菌を繁殖させないために、スタッフは麹の期間に納豆を食べないよう厳戒態勢を敷きながら建替えを進めました。



麹や味噌を作る伝統的な 道具をブラッシュアップ。

出来上がった店舗は、道路に接する部分に店頭幕を配置し、まるで時代劇から抜け出したかのような蔵造りの建物となりました。お店に入ると、麹の甘い香りに包まれます。正面奥には座敷があり、床の間の飾りが来客をもてなします。落とし掛けや店内の梁には、解体した建物から再利用したアカマツが使われました。

店に入って右側には作業場があり、そこで使う伝統的道具たちも県産材のスギで新しく作られました。米を蒸す巨大な蒸籠や、蒸した米を冷ますための舟と呼ばれる道具、そ



して麹蓋です。木製の道具を使用することなど、伝統的な麹の作り方にこだわる森田麴味噌店ですが、重労働が少しでも軽くなるようにと、4メートルほどの舟には新たに種付けした米を運びやすくするための足をつけました。米を入れる部分も取り外しができるよう細工されています。

「県産材を使う」ことは 「地元企業を活かす」こと。

「建てる前の目標だった。通る人の目を引く、看板となるような建物にする。は実現した」と森田さんは胸を張ります。「新規のお客様が増えました。通りかかった時に覚えていて、あとで買いに來てくれる人もいます」とも。

「地元の木を使えば地産地消で地元も潤いますし、自分も癒されてストレスがなくなります。最近では、都市部でも木造のビルディングが増えるなど、木材が見直されてきていると思います。ただ、大手企業は外材を使う場合がほとんどなので、ぜひ県産材を使うためにも、地元の企業を選んでほしいですね」と佐々木さん。

木材の持つ可能性が目される今こそ、県産材を有効に使うことが、ローカルビジネスの発展につながるのかもしれない。

木を生業とする会社の事務所を 県産材のオールスターが盛り上げる。

【施主】 有限会社 下久保林業

青森県十和田市大字深持字山ノ下123-2
TEL.0176-26-2151

代表取締役 下久保 眞信 様

専務取締役 下久保 仁志 様



県産材を使用した部分

《内装》
多種（腰カベ）

《構造》
ヒバ（土台・化粧柱・大引）・スギ（柱・下地材）・アカマツ（梁）

長いスパンで利益を生み出す林業という仕事。

一度人間の手が入った山は、伐採と植栽を繰り返して整備し続ける必要があります。下久保林業は、戦後に荒廃した十和田近隣の山に、林道などを整備し、薪や炭などを販売する会社から出発しました。2023年11月には、青森県の林業のトップランナー的存在として、「日本農林漁業振興会会長賞」を受賞

県産材の博物館のような内装が魅力。

ヒバのカウンターの下部から左右手前にはカラフルな木の壁が広がっています。この木は塗装したのではなく、8種類の天然木を並べたもの。

赤色のアサダやサクラの木。茶色のグラデーションは、エンジユ、イチイ、アカマツ、キハダ、クリ。黒っぽいタモカケヤキの木は、長い間地中に埋もれ化石のように変化した神代木（じんたいぼく）と呼ばれる木。

事務所の建設に使われた9割の木材は下久保林業の倉庫に眠っていたもの。80歳を迎えたという代表取締役の眞信さんは、どの木についてもストーリーを語ってくれます。

「この打ち合わせ用の机は、奥入瀬溪流のアサダの倒木だよ」。今は持ち出すことすら叶わない奥入瀬溪流の木が、国立公園になる前に電力会社から撤去を頼まれた幸運で手に入り、倉庫で長い間出番を待っていたのだそう。

林業屋のように長い目で見た建物作りを。

木の一つひとつに確かに刻まれた下久保林業の歴史が、贅沢に事務所を彩っています。

しました。そんな会社の勢いを象徴するように、新しい事務所が、2023年4月に竣工しました。事務所の入り口を開けると、ヒバの香りに包まれます。40年以上前に下北から買ったという円柱加工されたヒバが6本、社員デスクの間に立ち、厚さ10cm以上はあるヒバのカウンターが迎えます。紛れもなく林業の会社に来たのだと実感させてくれます。



事務所の設計施工を担当したのは、かつては製材所を営んでいた眞信さんの親戚が創業した三次に本社を持つサンロク。創業者同士からのお付き合いの2社だからこそ、県産材についても忌憚なく語ってくれました。「建築資材の値上がりが続く中、木材は唯一値下り傾向です。新築住宅に占める木材のコストは12%前後です。県産材は高いというイメージを持つ方もいますが、使ってみると「地元の木にはシロアリが出なくて、外材から出てくると言う大工さんは多いです。長く住むなら県産材が良いんじゃないかな。もう少しすると、80〜100年経った木が出てくる時期なのでおすすめしたいです」と語ってくれました。



10

活用事例

施主と施工者の信頼関係が つくった海辺の定食屋さん。



施主 有限会社東海
店舗 海鮮亭東海

青森県八戸市坂牛上島ノ木沢28-1
TEL.0178-27-9511
青森県八戸市鮫町小舟渡平10-76
TEL.0178-38-6560

代表取締役 大平 豊作 様

県産材を使用した部分

《内装》
スギ(壁・天井)《構造》
ヒバ(土台)・スギ(柱)《外装》
スギ(外壁)

海が見える 海鮮定食屋さん。

八戸市鮫町に店をかまえる海鮮亭東海。海鮮丼や磯ラーメン、刺身や焼き魚などの海鮮料理が楽しめる定食屋さんです。店内の大きな窓からは雄大な太平洋を望むことができ、東海に来るだけで八戸の魅力を堪能することができます。なかでも県産のスギ材を使用した組子細工の美しさは圧倒的。組子の模様すべて異なるこだわりの設えです。大平社長のお気に入りには、個室の襖と天井。こだわりの組子細工に囲まれた個室は、高貴な雰囲気が出ており、大切な時間を過ごすにはうってつけです。

建物目当てで県外から来られる方も多くいるようで、ほとんどの方が店内の写真を



撮って帰るといいます。「この大工さんですか？」と聞かれることもしばしばあるのだとか。そんな東海の建築を担当したのは、三戸郡田子町の大坊建設。「要望をこんなに聞いてくださる大工さんは、他にいないと思う」と大平社長。大坊建設の大坊社長とは古くからの知り合いなのだそう。



信頼関係ゆえの 「おまかせ」設計。

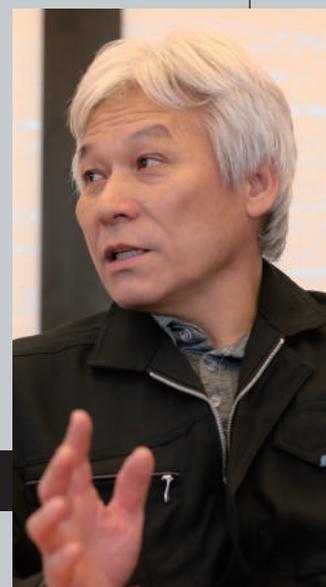
東海の建物には県産スギがふんだんに使われています。大坊社長は、最初から鉄骨で建てるという選択はなかったといいます。それは、木の質感を全面に出すイメージが明確にあったからでした。大平社長はほとんど「おまかせ」で東海の設計をお願いしたとのことですが、建設中にアイデアやイメージをよく共有されていたそうです。

店内のいくつかの設計には、大平社長が考案したデザインもあるのだそう。例えば、個室の天井や店内の間接照明。天井には組子細工がガラス越しに見え、間接照明は店内上部の長押し青いライトが設置されており、壁面にあたった青い光が空間を照らしています。大平社長が考案したアイデアは、大坊社長が今までで発想したことのないものであり、驚きの連続だったといいます。大平社長は、「施工者と積極的コミュニケーションを取り、自分の希望をしっかりと伝えることが重要だ」と感じていたそうです。大坊社長も「大平社長が熱量を持って伝えてくれたからこそ、できないで終わらせたくなくなっ

た」と話します。施主側も施工者側も、同じ立ち位置で意見を出し合っていくことで、最高の建物が生まれるということ、完成した建物が物語っていました。

あなたの依頼で 大工の技術が継承。

お二人と話していると、実は大工さんを育てるのは依頼側なのかもしれないと感じました。県産材を使用するには、時間やお金が多くかかる場合がほとんどですが、県産材を使用する依頼がないことは、大工の技術が継承されることも進化することもないでしょう。その継承と進化を引き出すのは、ある意味依頼側の無茶ぶりなのかもしれません。



有限会社 大坊建設 | 取締役 大坊 幸吉 様

下北の自然を感じて学ぶ、 地元愛を育むキャンパスに。

施主

むつ市 企画政策部 企画調整課 青森県むつ市中央一丁目8番1号
TEL.0175-22-1111

施設利用者

青森大学 むつキャンパス

青森県むつ市金谷1-10-1 下北文化会館 2F
TEL.0175-31-0044

事務局長 櫻井 直喜 様



県産材を使用した部分

《内装》

ヒバ(壁・天井)

《下地材》

スギ(胴縁)

《造作》

アカマツ(額縁)・ヒバ(格子・サイン)

市民にも愛される
新しいキャンパス。

2022年4月に開校した「青森大学
むつキャンパス(以下むつキャンパス)」は総合
経営学部、社会学部、ソフトウェア情報学部
の3つの学部からなる、下北地方で初めての
4年制大学です。



むつキャンパスは1985年に建てられた
下北文化会館の2階部分を改修して設置
されました。階段を上った先のホールに立
ち入ると一気に空間が開け、ヒバのやさしい香
りに包まれます。ヒバの板材を張り巡らせ



たウエーブを描く天井や、ヒバとアカマツから
なる部材を格子状に仕立てた壁、ヒバ製の
案内看板など、目を奪われる木の演出に溢
れているキャンパス内。北側に配されたコミュ
ニティラウンジは、学生のみならず市民も自
由に利用できるスペースで、ワーキングに
活用されたり、中高生の勉強の場としても
利用されています。

県産材の使い方
空間の雰囲気を変える。

むつキャンパスの開校以前は下北地方には
大学がなく、進学するためには地元を離れ
る必要がありました。下北に大学ができる
ことはむつ市の悲願だったのです。

「長年待ちわびた下北地方での大学開
講、自然が豊かな下北らしいキャンパスで大
学生生活を送って欲しい」というのが、むつ市側
の思いでした。そのオーダーを受けた株式
会社八洲建築設計事務所は、これまでも
県産材を用いた公共施設や学校などを手
掛けてきた会社です。下北の名産であるヒ
バを随所に用いながら、教室や空間同士の隔
たりをなるべく減らすためにガラス、パーテ
ションを採り入れ、窓の光が廊下まで届くつ
くりになっています。また、むやみに木を多
用するのではなく、壁や窓枠など人の視線

が向きやすい箇所に効果的に木を用いて、木
がより目立つような視覚を生んでいます。そ
れまではコンクリート建築らしい重厚な雰
囲気だった下北文化会館の内観が、木の温
かさを感じながら落ち着ける場所に生まれ
変わりました。



地元愛が芽生える
場所であってほしい。

「学生達はもちろん、オープンキャンパス
に参加した生徒保護者、来学される一般の
方々も喜んでくれます。青森市や東京のキ
ャンパスから来る先生方も空間の素晴らし
さに驚かされ、むつキャンパスで講義を行うこ
とが楽しみだと言ってくれます。素敵なキ
ャンパスを御用意下さったむつ市に感謝して
います。」とむつキャンパス事務局長の櫻井直
喜さんは話します。

実はむつ市内の公共施設で県産材を全面
に押し出した建築物は、むつキャンパスが初
めてなんだとか。ヒバは青森が世界に誇る木
材です。地元の木に囲まれながら学生生活
を過ごした経験が、故郷の良さを再認識す
るきっかけになるのかもしれない。



事務所から会社のことが分かる。 県産材100%使用のこだわり。

施工 有限会社 金子ファーム事務所

青森県上北郡七戸町荒熊内150-2
TEL.0176-62-6393

常務取締役 阿見 年典 様



県産材を使用した部分

〈内装〉

ヒバ・アカマツ

〈構造〉ヒバ(土台・柱・下地材)

桁・母屋・梁(アカマツ・クロマツ)

〈外装〉

アカマツ

七戸町で40年以上続く 畜産会社。

七戸町で肥育牧場を経営する金子ファーム。牧場内でジェラート店やレストランを営業するほか、明治時代に建てられた厩舎を観光資源として再活用するなど、六次産業化や循環型畜産といったさまざまな取り組みに力を入れています。家族経営から始まり、40年間で160人が働くという規模に会社は成長しました。地方の牧畜経営のモデルケースとして多数の受賞歴もあり、県内外から商談や視察に訪れる業者も少なくありません。

2022年に金子春雄会長の自宅にあった事務所を、七戸町の市街へ移転新設しました。理由は手狭になったことや、金子会長が自宅を事務所としておくことには限界があったこと。完成した事務所は100%県産材を使い、施主の思いを形にした施工者の仕事ぶりがありました。

なぜ県産材にこだわった 事務所にしたのか。

「金子会長は木材を大切にされる人」と口をそろえて話すのは、金子会長から事務所建設を二任された副社長(常務取締役)の阿見年典さんと、施工を担当した田中工務店の田中貴司さん。田中さんはジェラート店やレストラン、金子会長の自宅までも施工しました。事務所の木材も金子ファームで大切に保管していた木材を使っています。田中さんによると、施工の邪魔になる牧場内の木を切ろうとしたことがあり、金子会長に叱られたことがあったようです。阿見さんは「金子会長は牛も好きですが、木が本当に好きな人。倒れた木なども愛着をもち残しておくような人です」と話します。



事務所の新設にあたっては、金子会長から1本のクロマツを託されました。梁に使ってほしいとお願いされたクロマツは、事務所のエントランスから入った吹き抜けにある一番目立つ梁に使われています。当初は梁を隠す予定もありましたが、県産木材をふんだんに使うのであれば、見せる方が良く、田中さんは判断。無垢材の歪みも活かすように

設計し、内装の壁は一枚一枚のように貼るか相談し、細部に至るまで木を中心に考えた事務所となりました。

会社の考え方が 伝わる事務所。

新しい事務所には、お客さんをおもてなしする貴賓室を作りました。金子会長が持ついた木材でつくった一枚板のカウンターテーブルを設置し、壁や扉には県産ヒバを贅沢に使用。以前の商談では、実際に自社で生産した肉を食べてもらうような場所がなかったという課題がありました。阿見さんは「木に囲まれた部屋の雰囲気は肉の価値を引き上げる。海外のバイヤーが試食した際はとても喜んでいました」と話します。

「普通の事務所を作るより、約3倍も手間をかけています」と苦笑する田中さん。木材選びにも時間をかけ、節を活用したり、壁材や床材で使い分けたりと大工の技術を披露する場にもなり、施主の細かな注文や思いに応え、大工の心意気や技術が活かされた事務所となりました。だからこその他にはない、地元のものへのこだわりが事務所から伝わってくるように思えます。

